

## 1. 全体の概要

KATE (Korean Association of Teachers of English) 国際大会2011 は、7月1日-2日にソウルの延世大学で行われた。参加者は約400名、Empowering English Teachers in the Globalization Eraというテーマの下、開催された。海外からは基調講演者としてKaren E. Johnson(Pennsylvania State Univ., USA), David Hayes (Brock University, Canada), Simon Borg (Univ. of Leeds, UK)の3名、提携学会からの招待講演者としてVictoria Zavyalova(Far Eastern Federal University, FELTA), Ramesh Nair(Universiti Teknologi MARA, MELTA), Meei-Ling Liaw(National Taichung University, Taiwan), Antonia Chandrasegaran(National Institute of Education, Singapore)と私の計5名、およびKATEと中国の特定の大学間の交流関係に基く2名の講演者 Gao Mingxia(Yanbian University), Xue-bo Cui(Yanbian University)であった。

今大会は昨年度のJACET全国大会(仙台)との共通点が見られた大会だったように思う。「教員養成と研修」を全体のテーマとして掲げ、基調講演者の3名全員が大会テーマ分野から招待されていた。またfeatured speakersである私たち5名もKATE側からcurrent trends and issues in teacher education in each contextをテーマとして講演することが要求された。韓国からの発表者1名を加えて招待講演者は3名ずつに分けられ、2つのパラレルセッションとして大会2日目に同時時間帯に行われた(その時間帯に他の研究発表は行われなかった)。

大会中、大学教員や韓国及び海外大学の博士課程学生の研究発表、小学校・中学校・高校教員の研究発表、ブリティッシュカウンシルをスポンサーとする教員研修の1日ワークショップなどが行われた。イタリア、中国、台湾、そして日本からの発表も併せて全部で107件の発表数であった。協賛はThe National Research Foundation of Korea, British Council Korea, Embassy of the US, International Communication Foundation, Chungdahm Learening, English Mou Mou, Hyundae Yong-o-sa, Daekyoで、協賛発表も数件行われた。

## 2. 発表内容

Keynote Speech のKaren Johnsonは “A Sociocultural Perspective on Second Language Teacher Education” というタイトルで基調講演Iを初日の開会式直後に行った。教師教育を今までの伝統的なアプローチではなく、Sociocultural perspectiveに基づいて考えた場合、どのように教師は考え、成長するべきなのかが、彼女自身が教科教育法の授業などで用いている様々な実例を用いて報告された。教師の専門性の成長はinquiry-basedであるべきで、自分のおかれた学校などのコンテキストと学習者のニーズを熟考しながら実践を通して成長していくことが大切だ、という結論だった。

大会初日の午後にはもう一人の基調講演者、D. Hayesが “Empowering English Language Teachers through Effective Teacher Education: Lessons from International Experience” と題して基調講演IIを行い、会場は満杯となった。韓国の教師教育をよりよくするためにはどうしたらいいのか、という観点から講演を行い、PISAのスコアが非常に高いフィンランドを例に出し、なぜ教師教育がうまくいき、その結果学習者の高いスコアに結ぶつたかを説明し、他の国や文化のコンテキストを知り、そこから学び、自分のコンテキストに置き換えて改善していくことが重要であると結論付けていた。また学校におけるメンター(実習指導教員)の研修と、教師教育を行う側のteacher trainerの研修も行うべきである、という意見には強く賛同した。

大会2日目朝にはもう一人の基調講演者、S. Borgが “Teacher Cognition and Teacher Autonomy” というタイトルで基調講演IIIを行ったがこちらは昨年度のJACET全国大会での基調講演とほぼ同じ内容であった。

研究発表の方は、The Use of ITE in Language Teaching, Intercultural Communication, Curriculum, Testing, Teacher Training, SLA, ELT Approach and Methodology, Teacher training, L2 Writing, Second Language Teachingの領域に分けられており、さまざまな発表があった。また、British Council による英語による授業の進め方についての一日ワークショップが大会2日目に行われ、全部で4つのワークショップと午後にはS. Borgを交えたパネルディスカッションも行われた。韓国では2004年に英語による英語の授業(TEE)を行うことが発表され、2008年の李明博大統領の就任演説でもそのことが取り上げられて当時話題を呼んだが、実際の現場ではなかなか浸透していないのが今までの現状であった。しかし、昨年度からvoluntaryではあるが教員対象の6カ月のintensive teacher training(うち、1か月は海外での研修)が開始され、今回の発表の多くがそのintensive teacher trainingとTEEについてのものであったのが興味深かった。

私の発表は30分発表+10分の質疑応答の枠で行われ、日本の英語教員の養成と研修の現状、特に中等教員養成についてとその課題について発表を行った。韓国・日本・台湾という順番で3名が発表し、参加者も非常に多かった。質問も日本のALTについてやTEEについてなど多くいただき、程度やスピード感の差はあれ韓国も同じような問題を抱えていることが改めて伺えた。また台湾の初等教育における英語教員養成のついての発表も非常に興味深かった。

今回、招待講演は基調講演と同様に200人ほど入る大きな講堂で行われた。また、基調講演者も含む招待講演者はすべて、招待講演以外にも小教室で行う研究発表を行うかどうか事

前に問い合わせがあった。私は準備の都合上、招待講演のみをお引き受けしたが、招待講演と個人の研究発表の2件を行った講演者もいた。今回は招待講演のテーマがあらかじめ決められていたため、個人の研究発表も行いたい講演者のためにはよい仕組みだと思った。また事前に大会要綱用にA4で3~4枚のアブストラクトの提出が求められ、そのために大会要綱は非常に分厚いものであったが、今回JACET50で試みている大会プロシーディングスと呼べるほどのものではなく、従来の大会要綱であった。

その他に、日本からは、Maiko Kimura氏(Mukogawa Women's University)&Hiroko Arao氏(Mie University)、Stephen Richmond氏(Kyoto Gakuen University)、Neil Heffernan氏(Ehime National University)の発表が行われた。

### 3. 個人的な体験

私は、JACET 代表として6月30日から7月3日まで延世大学内のAllen Hallに滞在した(朝食付き)。空港と宿泊先への送迎は高麗大学院生が担当しており、事前に担当委員から送迎が必要かどうかの問い合わせがあった。大会前日の夕食(私は木曜日の午前中の授業を行ってから夜到着したため欠席した)、初日のレセプションおよび2日目の夕食がゲスト用に準備されていて素晴らしいもてなしを受けた。初日夜のレセプションはキャンパス内のホールで行われ、招待講演者を初め多くの大会参加者と交流し、また、延世大学の学生のマリンバ演奏や手品の披露が行われた。その際に今回JACET50 に来られる予定の2名(JACET50 シンポジウムのパネリスト**Dr. Chan-Kyoo Min**とKATEからの派遣講演者Dr. Ae-Jin Kang)にもお会いできた。また昼食は他の大会参加者と同様にキャンパス内の食堂にクーポンを持って行って食事をするスタイルで、他の参加者と交流ができる貴重な時間となった。学会中は、廊下にフリーの飲み物やお菓子が置いてあった。招待講演者にはまた、大会終了後の7月3日に希望者用にソウル市内3時間程度のツアーが用意されていた(私は月曜日授業があり午後便で帰国したためこちらも不参加)。また、大会運営は、最後の総会とEnglish Teacher Education Policyというタイトルのパネル・ディスカッション以外はすべて英語で行われた。レセプションの際に前会長が2004年ごろまでは発表者も毎年5、6名ほどの小さい学会であった、とおっしゃっていたことを考えると韓国の英語教育熱と並行して学会が急速に国際化し発展したことが伺えた。

今回、JACET 代表として大変温かい歓迎を受けたこと、JACETから貴重な機会を頂き、学会に参加させていただいたことに心から感謝したい。またこれからも、このような機会を通してますますKATEとJACET 間の会員同士の交流が盛んになることを祈念したい。